師範ブログ９

庚寅神無月弐拾九日

無涯塾師範　廣瀬敏男

礼　儀

緩和医療医である大津秀一氏著、『死ぬときに人はどうなる１０の質問』の記述に参考になる箇所があったのでその一部を引用させてもらう。

それによると、新渡戸稲造が『武士道』という本の中で、「礼の最高の形態はほとんど愛に接近するものである」といっている様に、**礼儀とは本来思いやりから生まれ、愛に近いものである。型通りの、定型句を並べるだけではよい礼儀とはいえない**。

武道は「礼に始まって礼に終る」といわれるが、私たちは真に心の底から「居合道」に礼を尽くしているであろうか。日本文化の象徴である「道」、殊に剣道・居合道は当然のこととして、武道ではない「禅道」や「茶道」といった直接生死に係わらない「道」ですら先人が命を賭して磨き育ててきたものである。

まして居合や剣術の類は闘えば、「生か死」しかなかったのである。故に、術に業に工夫を凝らし、武器も強く使い勝手のいいものに進化させた。

十月十日のブログに、**居合を心で学ぶ**には、「道場に惚れ」、「師匠に惚れ」、「刀に惚れ」、「着衣に惚れ」なければならないと載せましたが、それはとりもなおさず「道場に礼儀」、「師匠に礼儀」、「刀に礼儀」、「着衣に礼儀」、そして「仲間に礼儀」であります。

重ねて申し上げるが、新渡戸稲造の『武士道』にあるように、礼儀とは思いやりから生まれた、愛に近いものでなければならない。

こう申せば、賢明な皆さんは、「無涯塾」に、「先生や仲間」に、「刀や着物」に、どういう気持ちで接すべきかお分かりのことと思います。

精神面と業の向上をバランスさせることこそ居合道の修行ではないでしょうか。　了